

東日本大震災を体験した生徒たちの思い・考え

— 2011年～2023年までの記録—

(2023年・特別編集版)

1 はじめに

東日本大震災が発生した **2011年から2021年まで**、被災地域にある **4つの高校**(宮古高校、山田高校、岩泉高校、宮古北高校)において、『インド洋大津波と東日本大震災の比較』というタイトルで、防災・減災や復興、国際理解、環境問題等について情報を提供する授業やプリント学習を実施してきました。その中には、震災当時高校2年生だった生徒から保育園年長だった幼児まで(**12学年分**)の**生徒達の震災時や震災復旧・復興時の思いや考え**が、授業を受けた感想やアンケート結果、あるいは授業の内容をふまえた **600字の小論文**という形で多数記録されています。

生徒たちが書いてくれた**小論文は162編**(久慈東高校での出前授業の際の6編を含む)あります。これまで、6つのテーマ別に30～36編ずつにまとめて教材として使用してきましたが情報量が多すぎて使いにくい点があったので、**今回、短縮版を作成**しました。

全60編を**15編ずつ**、4組(**セレクト1～4**)にまとめ、**各小論文を『4つの内容』のどれに関するものか**が分かりやすいように示しました(赤丸○で示す)。

(内容の分類) 『体験』：被災体験と伝承

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『支援』：国際支援・国際交流

『生き方』：これから私ができること

今後、東日本大震災発生当時、まだ小さかったり、生まれていなかった子供達が高校へ入学してきます。そのような子ども達に「地域に根ざした防災・減災」等についてどのように伝え・考えてもらうかの一つの方法として、**上記資料が活用でき**

ると考えます。東日本大震災を体験した人達の思い・考え（「他人事」）を、「自分事」にできると思います。

2 利用法

たとえば、以下のような方法が実践できると思います。

- (1) 【セレクト1～4】の1つを選び、すべて印刷し、対象者に配布する。
- (2) その資料を読み、1つの小論文を選んだうえで、以下の課題を提出させる。

A：あなたの選んだ小論文の筆者は、どういう想いでこの文章を書いたと思いますか？ あなたの考えを80字以上～100字以内で述べなさい。

B：あなたが共感したのはどういう所ですか？ 80字以上～100字以内で述べなさい。

C：あなたが選んだ小論文を読み、これからあなたができることを、260字以上～300字以内で述べなさい。

- (3) 提出された小論文のうちのいくつかを、選んだ小論文と一緒に掲載し、対象者全員に配布して、**想いや考えを共有**する。

また、1つの小論文を選び、対象者全員で上記の(2) **A～C** について話し合う、ということも可能だと思います。

防災教育や復興教育・環境教育・国際理解教育のワークショップの導入として、利用できる場面も想定されます。

資料の活用方法は自由です。たくさんの方々が活用し、繋いでいただくことが、小論文を書いてくれた生徒達への御礼になると考えます。

※ **この教材の実践例**として、宮古北高校と宮古水産高校で2020～2023年度に長期休業中の理科の課題として実施した中から**3名分の小論文も掲載**します。

被災地域の高校生の想い・考え（2011～2021年）

【特別編集版】（全15編）

実施年度（実施した高校名）

『題名』 番号）（内容の分類） 『体験』：被災体験と伝承

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『支援』：国際支援・国際交流

『生き方』：これから私ができること

平成23～26年度（宮古高校）

『私が考える（できる）国際協力や支援活動』 01) 体験・環境・支援・生き方

『私が考える（できる）マングローブの保護』 02) 体験・環境・支援・生き方

『3.11から三年目の今、私ができること』 03) 体験・環境・支援・生き方

『3.11から三年目の今、私ができること』 04) 体験・環境・支援・生き方

『3.11から四年目の今、私ができること』 05) 体験・環境・支援・生き方

『3.11から四年目の今、私ができること』 06) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災を後世に伝える方法』 07) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災を後世に伝える方法』 08) 体験・環境・支援・生き方

平成28～30年度（山田高校）

『3.11から5年を経た今、私ができること』 09) 体験・環境・支援・生き方

『3.11から5年を経た今、私ができること』 10) 体験・環境・支援・生き方

『身近な自然環境を活用した防災・減災』 11) 体験・環境・支援・生き方

『身近な自然環境を活用した

津波への防災・減災』 12) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災から8年目の今、

私ができること』 13) 体験・環境・支援・生き方

令和2年度（宮古北高校）

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること ～紙で残す記憶～』 14) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 15) 体験・環境・支援・生き方

(※ 在籍年度・高校名・学年、氏名 ((震災当時の在籍校)・学年)、『題名』)

01)平成 23 年度宮高 3 年 S さん(宮高 2 年) 『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと考える。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりとたくさん問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思った。

02)平成 23 年度宮高 2 年 S さん(宮高 1 年) 『私が考える(できる)マングローブの保護』

マングローブとは、海水と淡水が入り交じる河口・沿岸に生育する植物群の総称である。また、マングローブは他の生物が生活できるような適度な環境を提供してくれていると同時に、台風等の暴風雨や高波・潮風から土壌や陸上生物を守っている。実際に2004年のスマトラ島沖地震の20数万人が亡くなったのは、津波防止に役立つ海辺のマングローブ林が日本向けエビ養殖のために伐採されたことが大きいと報道されていたのを覚えている。

天ぷらやお寿司など、日本人はエビを食べる機会が多い。調べたところ、その証拠に日本のエビの輸入量は世界第2位で、第1位のアメリカと合わせた二国で世界のエビの消費量の約7割を占めている。日本でマングローブは奄美大島以南にしか生息しないことから、マングローブ林の減少問題についてあまり意識されていない。しかし、上で述べたことから、私達はこの問題を無視することはできない。いわば日本人の欲望のために環境が破壊されているからだ。

解決策は、日本やアメリカが消費量・輸入量を減らせばよいという単純な問題ではない。エビの生産で生計を立てている人々に大きな経済的打撃を与えるからである。経済効率が悪くても、環境負荷の少ない養殖法への転換を進めていくことこそが今後の課題なのではないか、と私は考える。

03)平成 25 年度宮高 2 年 N さん(田老一中 2 年) 『3.11 から三年目の今、私ができること』

私は3.11の東日本大震災を実際に経験したし、実際に目にしました。その津波があってから3年目の今、私ができることは2つあると思います。

1つ目は、後世に伝えていくことです。私達は本当に辛い経験をしました。しかし、これが最後という訳ではありません。津波や大地震は、何年、何十年、何百年後かにはまた起こるものです。もしかしたら、東日本大震災よりもひどい震災になるかも知れません。次の震災でたくさん人の命を失わないためにも、このことを語り継ぐべきです。大人たちが語るより、私達若者が経験したことを話す方が、これからの人たちにはタメになるのではないかと思います。本当にあったことを話すのは正直辛い部分もありますが、全てを話すべきです。

2つ目は、3.11の大震災の反省をもとに、これからの街作りや防災対策について考えていくことです。これから将来、街などを復興・発展させていくのは私達です。その私達が、今からそういうことを考えていくべきです。どんな街にすればたくさんの命が救われるのか、どんなことをすれば多くの人々が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来を担う私達だと思います。

3年前の震災で、たくさんの辛いことや反省があると思います。それを語り継ぎ、考えていくことが私達ができることであり、私達の役割なのだと思います。

04) 平成 25 年度宮高 1 年 S さん(豊間根中 1 年)『3. 11 から三年目の今、私ができること』

現在、私達がすべき復興への手助けは、一番はまず「伝える」ことだと思う。アチエの地にある『津波博物館』や、『ノア方舟』で助かったガヤさんの語り部としての活動のように、後世に残せる形で伝えていかななくてはならないと思う。私は中学 3 年生の時、近い将来に大地震や大津波が来ると言われている和歌山県に、被災地の学校の代表の一人として講話をしに行ったことがあるが、やはり私達が身をもって痛感した悲しみや辛さ、震災への備え方は、できるだけ広める必要があると思う。

二番目は、「切り換える」ことだと思う。アチエの人々は、大災害を神様の恵みとして受け止め、プラス思考で前に進んでいる。「日常への感謝」や「たくさんの人との出会い」は、あの災害があったからこそ在るのである。命や大切なものもたくさん奪われたが、得たものも少なくはない。

そして、三番目、「返す」ことにつなげることが必要なのだ。「今までの分」「これからの分」、私達が災害を経験し、学んだこと、活かされたこと、失敗したことなど、全てを他の人の役に立つように使い、恩を返すのだ。

資料を読んで、文化は違っても「思いやり」や「助け合い」の精神は、どこにでも同じく存在していることを知った。文化や国境を越えた思いやりや助け合いの輪は、無限に広がると思う。そしてそれは今、私達がやらなくてはいけないし、私達が広げていくべきだと考える。

05) 平成 26 年度宮高 3 年 K さん(吉里吉里中 2 年)『3. 11 から四年目の今、私ができること』

東日本大震災から今日まで、様々な節目で「今の自分にできること」を考えました。その末に辿り着いたのは、「今を一生懸命生きる」ということです。具体性がない、と言われるかもしれませんが、私はこれが「今の自分にできること」であり、「やらなければいけないこと」だと思います。

震災で私たちは多くのものを失いました。未だに戻ってこないものも沢山あります。「明日やろう」と思っていたことができなくなりました。「当たり前だ」と思っていたことの大切さに気がつきました。今、生きているということが、どれだけ恵まれているのかを感じました。それゆえ、私たちは何をやるにせよ、この一瞬一瞬を全力で生きていかなければならないのです。震災により命を落としてしまった方々の分も、有意義な人生を送らなければなりません。

私たちが今を懸命に生きることは、将来の社会貢献にもつながります。震災での経験を活かし、未来を創り上げることができるのは私たちです。しかし、「一生懸命」というのは決して簡単なことではありません。辛いときも疲れてしまうときもあると思います。そういう時こそ、東日本大震災を振り返り、忘れないようにすることが大切だと思います。

震災前、当日、直後、全てを知っている私たちだからこそ創り上げることのできる未来を、一生懸命築いていきたいと思っています。復興に役立つ人間に成長していきたいです。

06) 平成 26 年度宮高 3 年 Y さん(重茂中 2 年)『3. 11 から四年目の今、私ができること』

私は、非常に海に近い小さな集落に住んでいました。しかし、東日本大震災によってこの集落は全滅してしまい、現在も仮設住宅で生活しています。震災後、その集落は災害危険区域に指定され、家を建ててはいけなくなっています。再び同じような被害を受けないための対策の一つです。この地域は、明治三陸大津波や昭和三陸大津波でも多くの被害を受けました。このことを後世に伝えるために先人は、津波到達地点を示した石碑と、二度と多くの犠牲者をださないように「此処より下に家を建てるな」と書かれた石碑を後世に残してくれました。この石碑については、これからも伝える必要があると思います。また、小学校で 1 年おきに行われる、昭和三陸大津波をテーマとし、当時の様子を台本にした全校表現劇「かがやく海の重茂に」もずっと伝えていくべきだと思います。私たちは、この劇のおかげで早いうちから過去にどのようなことがあったのか分かり、津波の恐ろしさを理解することができました。犠牲者が少なかったのは、これが理由であるかもしれません。

私は先人がしてきたように、後世へ自分が体験したこと全てを伝えていきたいと思っています。二度と犠牲者を出さないために。震災後に建てられた石碑にはこのように記されています。

『後世への訓戒 大地震の後には津波が来る とにかく高い所に逃げろ 住宅は津浪浸水線より高い所に建てろ 命はてんでんこ』

07)平成 26 年度宮高 1 年 Y さん(宮古二中入学前(小 6))『東日本大震災を後世に伝える方法』

私が東日本大震災を後世に伝える方法として最適だと思うのは、シムル島で歌われている「スモン」のように、親しみやすい方法で伝えることだと思います。「スモン」は、韻を踏んだり、リズムカルなので、子どもでも分かりやすくなっています。そして、歌うことによって覚えやすくなっています。歌詞も明るく、避難するときに役立つものが多いです。後世に伝えるべき事は、「津波の恐さ」だけではなく、「どのようにして逃げるか」だと思います。

伝えるためには、歌をつくる他にも、「紙芝居」や「絵本」、「かるた」など、子どもの遊びを取り入れるのが良いと思います。そうすることで、小さい頃から遊びながら津波に対する知識をつけることができます。私が卒業した小学校では、実際に「津波防災かるた」というものがありました。その「津波防災かるた」は卒業生が作ったもので、小学生でも分かりやすく、内容も面白いものが多かったです。こういったものを、もっとたくさん作って、幅広い世代の人達に楽しみながら覚えてもらえれば、もっと後世に伝えやすくなるのではないかと思います。

震災から時間が経てば経つほど、人の記憶から忘れられてしまうので、後からみても分かるように、形にして残すのが最もいい方法ではないかと思います。

08)平成 26 年度宮高 1 年 N さん(新里中入学前(小 6))『東日本大震災を後世に伝える方法』

東日本大震災を後世に伝える方法として、まず一番大切にしなければならないことは、地震を経験したこと、津波を経験したこと、震災で大切なものが失われたということを忘れない事だと思います。忘れてしまったら、伝える方法はもう無くなってしまうのだから。

私は、小学 6 年生の寒い卒業前の春に起こった事を、まだ鮮明に覚えています。卒業制作途中に止まったミシン、揺れた時計、波打った自分の心臓の音。あんなに早くランドセルに道具を詰めたのはあれが初めてだったと思います。全員でトイレに行き、入る直前で余震が起こり、うずくまった私達を抱きしめてくれた担任の先生の大きな腕でさえも、まだ記憶に残っています。帰る途中、当時小学 1 年生だった妹が震えているのを見て、妹の手を強く握って歩きました。「こいつだけは守ってやんなきゃ」と思って。私の住んでいる所は山の中なので、津波により家が壊れたとか、大好きな人が流されたとか、そういう被害はありませんでした。しかし、幼い私達の心には地震と津波への恐怖がくっきりと残されています。決して楽観視してはいけません。それを、岩手だけではなく、他県や自分の子供達へと伝えていくことが、後世へつなげていく一歩なんだと思います。

09)平成 28 年度山高 3 年 S さん(山田南小 6 年)『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校 3 年生となった。この五年間は、長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私は、もともと人見知りで、人となかなか接することができなかつた。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

10)平成 28 年度山高 3 年 A さん(山田南小 6 年)『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

私は、東日本大震災を経験して 5 年を経た今、日本の自然災害に対する意識を変えるために経験者である私たちが行動を起こしていくことが必要だと思う。これは、私たちにしかできないことであり、多くの人々の心を動かすために最も重要なことであると思う。

インド洋大津波で大きな被害を受けたアチェでは、ほとんどの地域で地震の後に津波があるという伝承や教育がなかったという。そのために約 16 万人の方々が命を落としてしまった。それに比べて、日本ではそのような伝承・教育はされていたはずである。しかし、なぜ東日本大震災では、多くの犠牲者が出てしまったのだろうか。

あの時を振り返ると、町の人々の様子が浮かんでくる。恐怖と困惑でざわついていて。その様子から、誰もがあんな巨大な津波が来るとは想定できなかったのだと思う。防災に対する一人一人の意識が低かったのだ。これからの日本の防災について考える時に、経験者が未経験者に震災のことを伝えていく場を増やす必要がある。語り部の活動があったとしても、それが全国へと広がらなければ、日本全体の防災につながらない。また、アチェで語り部をしている人の活動から分かるように、経験者が話す言葉にはとても重みがある。それほど説得力があり、人々の心を動かすことができるのだ。私たちの経験を伝えていくことが、風化を防ぎ、そして日本人一人一人の防災意識を高めるきっかけになるのだ。

11)平成 30 年度山高 3 年 O さん(船越小 4 年)『身近な自然環境を活用した防災・減災』

私は自然環境を活用するということで、山田の地形を活かした建物を造り、避難できる場所の整備が必要だと考えます。まず、山田は平地が少なく、山が多いです。その特徴を活かしてより高台への住宅再建が可能です。その為には山を切り崩さなければなりません。山が減れば反対する人達がいるかもしれませんが、その山を崩して出た土を海側の誰も住まない所に持ってきて、新たな苗や木を植えればいいと考えます。また、誰もが行ける高台の見晴らしの良い所に公園や広場を造ることができればいいと思います。私が実際に小 4 の時に経験した津波では、高台に上がる所が無く、ただの山の中を 1～6 年生まで泥まみれになりながらも駆け上がったのを覚えています。その時、後方から波がすぐ近くまで来ていて、電柱や家も自分達の方へ勢いよく流れてきました。そんなことがないように、誰でもすぐ上がれる広場があるといいです。また、小学校から家へ帰る時に松林を通して帰っていましたが、海沿いにすぐ松林があったおかげで助かった家も船越地区では多いと思います。

なので、山を崩した後の土や木は、海側に持ってきて盛り土をし、さらに松林のような自然環境を造ることが必要だと思います。防潮堤だけでは守り切れないところを林が守り、さらに家が高台にあることで、少しでも被害者や被災する建物などを減らすことができると思います。

12)平成 30 年度山高 1 年 H さん(山田南小 2 年)『身近な自然環境を活用した津波への防災・減災』

私は、小学二年生のとき「東日本大震災」という大きな自然災害を経験しました。大きな地震と共にものすごい勢いで津波が町をのみ込んでいく様子を今でも覚えています。

あの日の震災を経験し、犠牲者を出してしまった現実がある以上、次は少しでも多くの命が助かることを考えます。まず、津波から逃げることです。海沿いに防潮堤を造るだけではなく、木を植樹して津波の勢いを少しでも弱めることができると思います。このようにすれば逃げる時間を少しでも長くできると思うからです。海岸防災林は、さまざまな意味で役に立つから、高い防潮堤を造り壁ができるよりは、自然のものを使うのも私はありだと思います。逃げることを第一にして、そのためには何が必要なのかを考え、自然災害への防災をすることが大事だと思います。

山田町は、山と海に囲まれた自然豊かな町です。津波を経験し、海への恐ろしさはあるけれど、山と海の恵みがあって、おいしい海産物や農産物がたくさん採れます。だからこそ海や山などの自然を大事にしたいです。自然がたくさんあるということは、もちろん自然災害とかもあり、考えないといけないこともたくさんあるけれど、生活環境を豊かにしてくれる自然への感謝を持つことも私は大事なのではないかと考えます。木を切って人工物を造ることも大事だけれど、木を残すことによって森林の必要性を考えることも大事だと私は思います。

13)平成 30 年度山高 1 年 S さん(織笠小 2 年)『東日本大震災から 8 年目の今、私ができること』

8 年前の私は小学 2 年生でした。地震というものをあまり理解していなく、とても怖かったのを覚えています。帰りの会の時、机がとても動いていて、机の下にもぐるのも必死でした。

今の小学生は、震災を経験していない学年があり、小学校の先生が 3 月 11 日になると津波の話をするらしいですが、経験をしていない子供達や記憶がほとんどない子供達にどのように東日本大震災の事を伝えようか戸惑うらしいです。また、当時内陸の方の小学校に勤務していた先生方も多く、子供達に当時どのような事があったのか伝える人も少なくなっているそうです。そのため、高校生の私達や中学生が当時見た景色などを絵に描いて、小学生に説明したり、その時の気持ちなどを分かりやすく語ったりして、未来のために津波が来たらどうしたらよいかを伝えながら、死者をできるだけ減らすようにしていきたいです。

また、地元の子供達だけではなく、将来私が山田町や岩手県を離れたとして、その時大きな地震などが来たら、経験をしていない周りの人を誘導などし、自分から動いて死者を減らしたいと思っています。身近な人が亡くなっているからこそ、そして小学生の時にいろいろな先生方や大人の人に助けてもらった分、次は私が助ける番だと思いながら大人になりたいし、津波に限らず災害に遭った方々を助けたいです。

14)令和 2 年度宮古北高 3 年 T さん(小 2)『東日本大震災から十年目の今、私ができること ～紙で遺す記憶～』

私は中学生の時、防災活動として地震、津波の恐ろしさを紙芝居にし、保育園児に読み聞かせる活動をしました。自分が持っている震災当時の記憶を絵に描き起こし、易しい言葉を選ぶことで園児達も何かしら感じ取った様子でした。

そこで私は、「震災の記憶を紙に描き起こすこと」が自分にもできることだと感じました。小さな子供でも分かるように絵本調にするのも、震災当時の情景をリアルに描写するように随筆調にするのも大切です。

太古の昔から人間は、石板や羊皮紙に物事を記し、それが現代にも通じるものとなっています。紙で記すことで、震災経験者がいなくなった後もその記録を見返す事ができ、防災にも繋がります。決して記録の全てを覚えていなくても、地震で身の危険を感じた時に「高い所へ逃げろ、と昔の人が言っていた」と思い出すだけで、一人でも多くの人を助けることができます。

震災は、体験した人にしか分からないことがたくさんあります。そして、その恐ろしい記憶から逃げようと忘れたり、忘れたくなくても風化してしまうのが記憶です。決して心地良い記憶ではありませんが、忘れてはいけない記憶です。目をそむけたくなる震災の記憶に立ち向かい、紙に記して後世まで伝えることが、今の私達にできることです。

15)令和 2 年度宮古北高 2 年 Y さん(小 1)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

東日本大震災から 10 年が経とうとしています。私は小学生の時、未来の田老を題材にした劇をしました。中学生の時は、「田老を語る会」をしました。「田老を語る会」では、被害状況や当時の様子・教訓などを、津波を経験したことのない人に伝えました。私ができることは、考えて、伝えていくことです。「田老を語る会」は、現在の中学生も行っています。私はそれをこれからも続けていってほしいと思います。

私は震災で家族を 2 人亡くしました。当時まだ小学校 1 年生だった私は、そのことがよく理解できずにいました。ずっと 2 人の帰りを待っていました。そのことを思い出して泣くことが時々あります。亡くなった人のことを思い出すことも私にできることの 1 つです。たとえ亡くなっていたとしても、私の思い出の中で生きていてほしいと思うのです。

私は絵を描くことが好きです。昔から絵で好きなものを表現することが好きでした。私はいつか、もっと絵を描く技術を上げて綺麗な田老の海を描きたいと思っています。現在の田老はお店は建ってきましたが、まだ人が少ないと思います。田老の魅力を知り、それをたくさんの人に広めてほしいと思います。私も自分の絵で田老の魅力を伝えられるように、田老の事をより好きになりたいです。

この教材の実践例（3名分）

（1）（令和3年度宮古北高校2年 Sさん）（震災当時、保育園年長）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

防災のこと、自然環境のこと、どちらのことも考えて、自然環境を守りながら防災にも活用することができるということをしっかり考えて述べていることから、どちらも大切にしたいという想いが伝わった。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私がこの小論文に共感した点は、自然環境を破壊しないこと、そして自然を増やすことが大切だという点です。私も防災のために自然を破壊したり、活用しないことはもったいないと感じたからです。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私が今後できることは、自然環境と防災・減災のどちらにも目を向けて考えていくことです。自然環境と防災・減災のどちらかだけに偏ってしまうと、防潮堤を造るために自然環境に大きな影響を与えてしまったり、自然環境を守るために防災能力が著しく劣ってしまったりします。自然環境の保護と防災・減災のバランスをうまくとることが重要だと思います。したがって、この著者が述べているように、自然を用いることで、自然環境を破壊することなく、むしろ生き物が生きていくための手助けになるような防災・減災に繋げることができれば理想的だと思ったからです。私は、自然環境と防災・減災のどちらにも目を向け、どちらも大切にしていきたいと考えます。

選んだ小論文（震災当時、小学2年）『身近な自然環境を活用した防災・減災』

身近な自然環境を活用した防災・減災について、私はこれをもっと増やすべきだと思います。日本は年間を通して、様々な災害が発生する国です。中でも、毎年必ず日本に上陸する台風と、地震による津波への防災が重要と考えます。

強力な風と大雨をもたらす台風は、年々被害が大きくなっています。これに対して活用できるのは「森」だと思います。森は、自然のダムとして一定量の水を貯えることが可能です。また、木の根が地面を押さえているので、土砂の流出を抑えることもできます。

次に、津波に対して活用できるのは、資料にあるように「海岸防災林」だと思います。津波の威力そのものを弱める他に、物や人が海に流されにくくする効果もあります。災害を無くすことができないけれど、減らすことはできます。様々な災害に対応していくことが大切です。

そして、この防災の重要なところが「自然である」というところです。人工物でもこのような効果のある物を造ることもできますが、植物を用いることで、環境を破壊することなく、むしろ生き物が生きていくための手助けにもなります。自然環境を破壊しないこと、そして自然を増やすことが大切なことだと考えます。

これらのことから、私は身近な自然環境を活用した防災・減災を増やすべきだと思います。

（2）（令和3年度宮古北高校2年 Sさん）（震災当時、保育園年長）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

震災当時、幼かった自分のことを支えてくれた家族や友人・他の県の方々、そして外国からの支援に対し、恩返しをしようと感じ、そこから幅広い年代と接することができ、人を好きになったことを伝えようと思った。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

筆者は、この震災で母親を亡くしています。私は、皆家族が無事でしたが、気持ちが下がって前に進むことができない中で、人々の支えがどれだけ大切かを震災で改めて知った点。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

心が悲しい気持ちになっている人へ、私は小さな事でもいいので励ましてあげたいと感じました。手紙は文字でしか伝えることができなくて、どんな人が書いているのか、どんな気持ちで書いているかは分かりません。でも、手紙でも励ますことは十分にできると知りました。辛い時はお互いに支え合いながら苦しい日々を乗り越えることが大事だと思いました。沢山の方々が無くなったこの東日本大震災を忘れず、元の街以上に素敵に復興できたら嬉しいです。そして、助け合うために人、仲間がいることを忘れずに、命や心を守り抜きたいと感じました。

選んだ小論文（震災当時、山田南小6年）『3.11から5年を経た今、私ができること』

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校3年生となった。この五年間は、長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私は、もともと人見知りで、人となかなか接することができなかった。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

（3）（令和4年度宮古水産高校2年 Sさん）（震災当時、保育園年中）**A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

今後、いつ災害が起きても大丈夫なように、自分の経験した事を伝えていくことが大切だという想いで、筆者はこの文章を書いたと思います。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私も重茂出身で、とてもこの文章に共感しました。震災前から小学生がやっていた劇の「かがやく海の重茂に」をやっていたから犠牲者が少なく済んだんじゃないかというのは、私も共感できました。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私も震災を5歳の頃に経験したことがあります。その時は、何も分からない状態だったし、どうすれば良いか分からなくてとても怖い思いをした覚えがあります。その当時の私でも震災はすごく恐ろしいものだとか分るくらい怖かったです。

あの時は、たくさんの方々の支援に助けられたのを覚えています。多くの地域のたくさんの方から支援物資などを貰い、すごく嬉しかったのを今でも覚えています。私の住んでいる町は海がとても近くにあり、漁師がたくさんいる町で、震災の時はみんなで助け合って乗り越えました。私も誰かの役に立てるような人材になっていきたいと思っています。

選んだ小論文（震災当時、重茂中2年）『3.11から四年目の今、私ができること』

私は、非常に海が近い小さな集落に住んでいました。しかし、東日本大震災によってこの集落は全滅してしまい、現在も仮設住宅で生活しています。震災後、その集落は災害危険区域に指定され、家を建ててはいけないことになっています。再び同じような被害を受けないための対策の一つです。この地域は、明治三陸大津波や昭和三陸大津波でも多くの被害を受けました。このことを後世に伝えるために先人は、津波到達地点を示した石碑と、二度と多くの犠牲者をださないように「此処より下に家を建てるな」と書かれた石碑を後世に残してくれました。この石碑については、これからも伝える必要があると思います。また、小学校で1年おきに行われる、昭和三陸大津波をテーマとし、当時の様子を台本にした全校表現劇「かがやく海の重茂に」もずっと伝えていくべきだと思います。私たちは、この劇のおかげで早いうちから過去にどのようなことがあったのか分かり、津波の恐ろしさを理解することができました。犠牲者が少なかったのは、これが理由であるかもしれません。

私は先人がしてきたように、後世へ自分が体験したこと全てを伝えていきたいと思っています。二度と犠牲者を出さないために。震災後に建てられた石碑にはこのように記されています。

『後世への訓戒 大地震の後には津波が来る とにかく高い所に逃げろ 住宅は津浪浸水線より高い所に建てる 命はてんでんこ』